『正信偈』に親しむ

曇鸞大師

曇鸞大師は、今から千五百年程前、中国に出られました。当時、中国大陸の政権は北魏、梁の二国に分かれていました。大師は、両方の帝王から深く尊敬を受けたお方です。親鸞聖人は、二人の政治的実力者を教化し、仏教の帰依者になされた曇鸞大師のお徳を讃えられたのです。

凡夫のすくいとは

この世に生きる人は、一人残らず「煩悩具足の凡夫」であると、親鸞聖人は教えられます。われら凡夫は、いのちある限り生活に悩み苦しまねばならない。自分の力や努力によって、思うようにたすかる道もないのだと。その凡夫が、すくわれるただひとつの道は、仏の本願を信じ念仏もうすことであると教えられるのです。

お浄土をわが故郷として生きる

「南無阿弥陀仏」のお念仏は、お名号とか尊号と呼ばれ、仏さまの本願がことばとなったものであります。ですから、私たちがそのお念仏を称えていますと、「汝ら凡夫をすくわずにおかないぞ」という仏さまの誓いが心に沁みてくるのです。これが、仏の本願を信じる念仏者になるということなのです。本願を信じ念仏申す人は、お浄土に生まれ、かならず仏さまになっていくというのが、親鸞聖人の教えであります。

お浄土は、濁りのない清らかな仏の世界です。すべてのものが差別されることなく、平等に生き合い、ともに輝いている世界がお浄土なのです。もし、自分の都合だけがよければよいと考えるなら、それはお浄土とはいえませんね。念仏者は、身体はこの世でご縁の人びとと生活をしながら、その心は、いつもお浄土の心をわが故郷として生きる人なのです。

（本文・読み方）

本師曇鸞梁天子
常向鸞処菩薩礼
三蔵流支授浄教

（現代語訳）

曇鸞大師は、梁の時代の二人の国王が
常に菩薩と敬い　礼拝しておられた方です
三蔵法師菩提流支との出会いにより、浄土の

梵焼仙経帰楽邦
天親菩薩論註解
報土因果顕誓願
往還廻向由他力
正定之因唯信心
惑染凡夫信心発
証知生死即涅槃
必至無量光明土
諸有衆生皆普化

を説いた教えを受けて、長生不死の迷信を説く仙経を焼き捨て、仏国をよりどころにされました。

天親菩薩の『浄土論』を解き明かし、仏国土に生まれる術は、ただ仏の願いにもとづくと教えます。

仏の国へ往くのも還るのも自力でなく、仏から回し向けられる他力によるのです。

真実に生きて往く方向が定まる元は　ただ願いを信じる心にあるのです。

悩み迷う凡夫も　信じる心をおこしたならば、生死の不安をかかえた生活そのままで、目覚めの大事な縁となるのです。

仏のかぎりない光の世界に生きるものは、かならず他のいのちと共に輝く人生をたまわるのです。

蓮師会・永代経

日時　三月二十二日（日）
午後2時
午後7時

おつとめと法話

講師　秦（はた）　成淳（じょうじゅん）　氏
（松原市　善長寺住職）

今月の言葉

手は
その人の
願（ねが）いごとに
従（したが）いてゆく
志村（しむら）ふくみ

「今月の言葉」は染織家志村ふくみ氏が、「手」について書かれた小文から抜粋（ばっすい）したものである。

「手はその人の願いごとに従いてゆくとも聞いた。こころざしかたく生きているその人に手はどこまでもついてゆくと。」

自然界に存在する植物から、ただ一つの色を求め、生み出すことに生涯をかけておられる志村さんにして、はじめて言える言葉だと思われる。

しかし、願いがあれば、手はそれに従ってものごとがかなうとは言われない。同文に、「手は生涯（しょうがい）の伴侶（はんりょ）、自分の顔にも刻（きざ）まれぬ哀（かな）しみも、罪（つみ）も知っている。」ともある。

手とこころ（願い）は、その両方が合わさってはじめて作品が生まれるのである。ときには、手が先に動いていることもあるかもしれない。

＊志村ふくみ
紬織の重要無形文化財保持者（人間国宝）。随筆の名手としても知られ『一色一生』他多数の著書がある。

いぶきの会にご参加を

仏事のこと、最近気になることなどなど
気楽に話せば、こころも軽くなるかも？
おつとめとお話、お気楽にどうぞ!!

・毎月二十八日
・午後七時半～九時

編集後記

▽天然痘がおそれられていた明治初め、ワクチンである種痘（しゅとう）済の証札が、寺の書庫にある。証札には、九河貞蔵医師の名と印がある。九河家は代々当寺の門徒であった。九河貞蔵医師は、コレラの治療や感染予防に貢献があった方として広く知られる。

▽九五歳の母。認知はあるが、介助を受けてなんとか食事もできる。会話は試みるが返事の大半は意味不明。▽子供にとっては、なんでもできる頼もしい母だった。いつも忙しく働き、のんびりしている姿はめったに見ることはなかった。今は、細くやわらかくなった母の手。包むように握る。長い年月をいっしょに暮らしながら、やさしい言葉を十分にかけられなくてごめんねと言いながら。（K）